

「歌劇《ヘンゼルとグレーテル》 3幕のメルヒェン・オペラ」 ★★★

2009（平成21）年1月4日鑑賞<梅田ブルク7>

台本：アーデルハイド・ヴェッテ（グリム童話に基づく）

指揮：大野和士

グライントボーン合唱団

ロンドン・フィルハーモニー管弦楽団

ヘンゼル／ジェニファー・ホロウェイ（メゾソプラノ）

グレーテル／アドリアーナ・クチェロヴァー（ソプラノ）

ゲルトルト（ヘンゼルとグレーテルの母）／イルムガルト・フィルスマイアー（ソプラノ）

ペーター（ヘンゼルとグレーテルの父）／クラウス・クトラー（バリトン）

魔女／ヴォルフガング・アプリンガー＝シュペルハッケ（テノール）

眠りの精／エイミー・フレストン（ソプラノ）

露の精／マリン・クリステンソン（ソプラノ）

2008年上演・Livespire（オペラ）・110分

配給／ソニー

<『カルメン』や『フィガロの結婚』に比べると・・・その1>

グリム童話の『ヘンゼルとグレーテル』のお話がどんなものだったかきれいさっぱり忘れてしまったが、ドイツの作曲家エンゲルベルト・フンパーディングが妹の書いた台本を基に作曲した全3幕のオペラがこれ。原作とは異なる設定が多いらしいが、所詮元は童話。したがって『カルメン』や『フィガロの結婚』のように起伏に富んだストーリーが展開するわけではなく、森に迷い込んだヘンゼル（ジェニファー・ホロウェイ）とグレーテル（アドリアーナ・クチェロヴァー）の兄妹がお菓子の魔女（ヴォルフガング・アプリンガー＝シュペルハッケ）と対決する中で、貴重な人生訓を学ぶという単純なストーリー。したがって、私にはイマイチもの足りない感が。

<『カルメン』や『フィガロの結婚』に比べると・・・その2>

また何といっても決定的なのは、『カルメン』や『フィガロの結婚』ではよく知っているあのメロディ、このメロディが流れていくのに対し、私の音楽知識では『ヘンゼルとグレーテル』の中で知っている曲は1つもないこと。それでは、このオペラに対して親しみが薄くなるのは仕方なし。

もちろんこれは、作品そのものがダメという意味ではない。それは言ってみれば、劇団四季のミュージカルでも『李香蘭』や『南十字星』そして『オペラ座の怪人』や『レ・ミゼラブル』などの重厚なドラマ性の強い作品と比べると、『夢から醒めた夢』や『ユタと不思議な仲間たち』などの単純な作品はイマイチ物足りないのと同じようなもの・・・。

<注目は多様な人材の起用！ その1>

今回の『ヘンゼルとグレーテル』は、2008年にグライントボーン劇場で上演されたものだが、「グライントボーン音楽祭」の紹介映像で流されるとおり、その出演者は多彩。

最も印象に残るのは、グレーテル役のかわいい女の子アドリアーナ・クチェロヴァーだが、彼女はスロバキア人。それに対して顔はどう見ても男の子だが、声を聴くとこれは絶対女性だと思い、男女どちらなの？と疑うのがヘンゼル役のジェニファー・ホロウェイ。そんな彼女はアメリカ人。まずはこの2人の子役に注目！

<注目は多様な人材の起用！ その2>

他方、ビックリするような豊満な胸の谷間(?)を見せつける「お菓子の魔女」を演ずるのは、大男のヴォルフガング・アプリンガー＝シュペルハッケ。私は『ヘンゼルとグレーテル』をこのUKオペラで観るのがはじめてで、他と比較したことがないが、これは歴代の魔女役としてもかなりユニークなのは・・・。さらに注目すべきは、日本人指揮者大野和士の登場。ロシア帰りの女性指揮者西本智実は今や超人気だが、海外で続く彼の活躍は小澤征爾並み(?)のすばらしいもの。したがって、私としては知らない曲ばかりだったのが少し残念・・・。

2人の子役と大野和士はこの『ヘンゼルとグレーテル』でグライントボーン劇場にはじめて進出したわけだから、次々と多様な人材の起用を続けていくグライントボーン劇場の経営者たちに拍手！

<「貧しさ」に注目！>

ヘンゼルとグレーテルは、貧しいほうき職人の父ペーター（クラウス・クトラー）と母ゲルトルト（イルムガルト・フィルスマイアー）の子供たち。ワーグナー以後、リヒャルト・ストラウス以前のドイツオペラを代表するのがこの作品だから、セリフは全編ドイツ語。設定されている時代がいつ頃かはよくわからないが、この家族が住んでいる段ボールでできた家と、食べるものもロクにない中で留守番をしているヘンゼルとグレーテルの様子を見ていると、彼らがいかに貧乏であるかがよくわかる。つまり、グリム童話はメルヘンチックなウォルト・ディズニー風のおとぎ話とは異なり、しっかりと現実に根ざした物語・・・？

ヘンゼルもグレーテルも何日間も水しか飲んでないような貧乏生活だからこそ、お菓子の魔女が住んでいるスーパーマーケットの売り場のように積み上げられた多種多様な菓子を見て驚いたわけだ。しかし、当然そこにはグリム童話らしい恐ろしい畏が・・・。しかして、ヘンゼルとグレーテルはその畏に陥ってしまうわけだが、それを切り抜ける知恵を持っているのがこの兄妹。さて、2人はどんな知恵を発揮して魔女と対決し、これをやっつけるのだろうか・・・？

<どんな教訓が？>

ドイツをはじめとするヨーロッパ社会ではみんなキリスト教を信じているから、今日のパンを与えてくれる神さまに感謝しながら食事をするのが日常の風景。しかし今や、ヘンゼルとグレーテルには食べるものがロクにない状態。そんな中で家に戻ってきた母親が、手伝いもロクにせず子供たちが歌い踊っている姿を見てキレてしまったのは当然。しかしその折檻の最中に、せっかく牛乳が入っていた大切なツボを割ってしまったのは勇み足。また、その勢いにまかせて、子供たちに対して「森の中へ入って、イチゴを摘んできなさい」と命じたのはちょっとやりすぎ。だってその後、ほうきが売れて大喜びの父親がおみやげを持って家に帰ってきても、肝心の子供たちが森の中で危険な目にあったのでは何にもならないから。

そこで反省した母親と共に父親は森の中へ子供たちを捜しに出かけるのだが、この家族が会うのはヘンゼルとグレーテルがきっちり魔女退治を完了し、捕まっていた多くの子供たちを解放した後。そこで父親の口から語り歌われる教訓が、「いくら貧乏でも、ちゃんと神さまは自分たちのことを見守ってくれている」というものだが、こんな発想は日本人にはなかなかムリ。したがって、このオペラを鑑賞してこんな教訓をきっちり自分のものにするためには、少しは神さまについて勉強することが必要かも・・・。